

大地

第 65 号
2022. 1. 31. 発行
浄 國 寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎 睦

濃く淡く芽吹きもつともよき山路

登り来て一気に飲みし山清水

名水も瀬音となりて谷若葉

万緑の萌ゆる息とも山気とも

落椿昨日掃きたる後の花

北窓に日脚戻りて春近し

句集『朝の光』より
平成十一〜十三年

お・み・ご・ギョ

山崎隆史

「おんのじ(御の字)」は「御」の一字を頭に付けられる位、良い事、良い状態である事を指す表現です。ちよつと粋な言い回しですが、自分で口にしたことはありません。物事を丁寧にするとき、頭に「御」の字を付けるのです。

「御」という字の読み方は「おん」「おみ」「ご」「ぎよ」があります。このうち、「おん」「お」「み」は訓読み、「ご」「ぎよ」が音読みです。ひらがなだけの言葉とか、漢字を訓読みする言葉には、「おん」「お」「み」を付け、漢字を音読みする言葉には「ご」「ぎよ」を付けるのが原則です。

同じような言葉であっても、「お疲れ様」と「ご苦労様」、「お答え」と「ご回答」、「お年寄り」と「ご老人」、「お子さん」と「ご子息」、「お腹立ち」と「ご立腹」、「おまんま」と「ご飯」など、意識せずに自然と使い分けているものです。

「おみ足」はどういう流れでそうなったのか、「御」の字を二つ重ねたケースのようです。「お神輿」「お神酒」「おみくじ(御神籤)」などは「み」に「神」の字を当てていますが、元々は「御」だったのではないかと勝手に想像

像しています。

生活に溶け込んだ言葉に、音読みだの訓読みだの考えず、とにかく丁寧にしようと「御」の字を付けると、どんな言葉にも「お」が付くようになります。

「お味噌」「お醤油」「お赤飯」「お菓子」「お豆腐」「お茶碗」「お猪口」「お代官さま」「お奉行さま」「お師匠さん」「お屋敷」「お天気」「お洋服」「お食事」「お化粧」「お裁縫」「お仕事」「お電話」など、今更「ご」が正しいなんて言えません。

丁寧が過ぎると「おズボン」だの「おビール」だの、カタカナ言葉にまで「お」を付けたりしますが、「おシャツ」とか「おワイン」などと言わないのは何故なのでしょうね。

「お受験」「お荷物」「お約束」となると、それぞれ「お」を付けて必要以上に丁寧にする事で、別の意図が加わります。

仏教関係の言葉も「お」付きのものがたくさんあります。「お釈迦様」「お地藏さん」「お葬式」「お線香」「お焼香」「お賽銭」「お仏壇(お内仏)」、そして忘れてはならない「お念仏」。仏教の用語は中国から輸入したもので、当然音読みするものがほとんどなのですが、在家の人がこれらの語に闇雲に「お」を付けて敬意を表したのでしょう。

一月は「お正月」です。今年もおよろしく願っています。

宝物

東本町2 飯塚 靖二

二年程前から、健康維持のためのウォーキングのまねごとを始めた。その中で小生が一番魅力を感じ回数を重ねるコースは、高田城址公園である。

一時間半程、時間をかけて周辺の木々や妙高山の雄姿に目を向け、そして公園の案内看板等に関心を持ちながら、マイペースで楽しんでる。

高田で生まれ育った小生にとっては数えきれないほどの思い出があり、小さい頃から両親や兄弟ときたり、女房と子供たちと何回も足を運んだお花見は懐かしく心に残っており、従兄弟たちと来たヘラブナ釣り、そしてザリガニ取りの際、捕まえた時の子供たちの喜んだ笑顔が今でも鮮明に浮かんでくる。

ここは、この地に住む我々にとって全国に誇れる市民の大切な宝物であると、どなたも思っているはずである。日本三大夜桜といわれる桜、夏には東洋一と称され涼を誘う可憐な蓮の花、そして「江戸城」「大阪城」に次ぐ広大な規模と、全国的にもあまり類を見ない石垣のない構えと、宏大な堀を擁する高田城等、素晴らしいものばかりである。

しかし小生が、素晴らしいその移ろいを一人で楽しんでるものがある。季節に寄り添い、その時々顔を見せてくれる外堀の「蓮」である。厳しい冬が終わり残雪の妙高山が、その姿を映す水面に春を待ちかねて顔を出す新葉、そして夏、紅蓮・白蓮がその姿を誇らしげに咲き競う。初秋を迎える頃、葉も実も枯れ別の趣を見せてくれる佇まいの中に、ゆく夏を惜しむかのように紅蓮が一輪控えめに咲いている姿には心が和む。そして、公園に初雪が降り、枯れた蓮に薄っすらと雪が積もる情景は一幅の墨絵の世界といっても過言ではない。

春夏秋冬にその移ろいを見せてくれる姿はこの地に住む我々だけが、感じる事が出来る、何にも代えがたい素晴らしい宝物であると信じている。そして、それをいつまでも伝えられる平和なこの地であることを、願ってやまない今日この頃である。

〈年の始めをお寺参りで〉

今年も大勢の皆さんにお参り頂きました。雪の中、大変と思いますが、新井や板倉からも足を運んで下さいます。

来年は是非！年の始めをお寺参りで

【俳句】 自選十句

昭和町2 風間照子

夫の癖つきし絵筆の二日かな
つま ぐせ えまで ふつか

手に馴染む棕櫚の箒や日脚のぶ
なじ しゅろ ほうき ひあし

筍を包む購読紙の社説
たけのこ こうとくし

くるくると日傘のなかの小宇宙
ひがせ

南瓜煮てうまいといふも一人かな
かぼちゃ いひとり

竹の春ふつと止みたる風の音

木漏れ日の濛の小径や秋惜しむ
こもれび ほり こみち

着ぶくれし後姿の父に似し
うしろすがた に

通院の友となりたる毛糸帽
つういん けいとぼう

冬二日月魂の詩欲すれば
ふゆみかづき たましい じつた

『象の会合同句集』より転載

男の子・女の子

— 夫の新盆も過ぎて —

北本町3 横関レイ子

私の初孫であり外孫のAは、現在中学一年生の男の子である。思春期と反抗期が重なったせいなのか、私が何か聞いても「あー」とか「うー」しか言わない。大事なことを質問しても「レイちゃんは知らなくていい」と、実に素っ気ない。

私には全く愛想がないAではあるが「どうしてそんなにじいじのことが好きなの？」と言うほどに、亡くなった夫のことは大好きであった。片時も夫のそばを離れなかったものであるが、夫が亡くなった今考えてみると、Aは大好きな人とたった十二年しか一緒に過ごせなかったことになる。かわいそうに。

二番目の孫K（内孫だが同居していない）は、小学二年生の女の子である。とにかく読書が好きで、時間さえあれば本を読んでいるらしい。そう聞いていたので夫の百力日法要の時、私はKが興味を持つかと思い、「これがお経の本だよ」と言って彼女に勤行集を見せた。

当日は若ご住職が来て下さっていたのだが、読経が始まるとKはなんとすらすらとご住職と一緒に読経を読み始めたのである。おそら

く生まれて初めて目にしたであろう赤い経本を持ちながら、最後まで間違えることもなく読み終えた。たくさん本を読んでいる子はこんなこともできるのかと、私は自分の孫のことながら驚いた。

「Kちゃんが横関家を代表してお経を読んでくれたんだね。仁じいじもきつと喜んでくれているよ」

夫もまさか自分が死んだあと孫にお経をあげてもらおうことになるうとは、おそらく生前夢にも思わなかったに違いない。だが、幸せなことであると言えるのかもしれない。

その後納骨のためにみんなでお墓まで行ったが、読経の前にご住職はKに、「次のお経は〇〇ページからだよ」と優しく教えて下さり、その光景はそばで見ているのもとても微笑ましかった。

私にはもう一人内孫の女の子Oがいる。だが、彼女はまだ幼稚園児なので、夫がいなくなったことについてはたしてどの程度理解しているのかはわからない。

しかし、Kは自分の祖父の死を、彼女なりに受け入れたようである。法要の後しばらくして、Kから私宛に手紙が届いた。近況報告の後、結びにはこう書いてあった。

「ねえ、レイちゃん。ひとしじいじは天国でなにしているんだろうね」

その最後の一文を読んで、私は泣いた。そ

して、すぐに返事を書いた。

「ひとしじいじは、空の上の高いところから、KちゃんとOちゃんをみまもってくれているよ」

確かに夫は、誰も手の届かない遠い所に行ってしまった。しかし、三人の孫たちは着実に日々成長を続けている。そのことに深く感謝しつつ、これからは健やかに育っていくことを心から願っている。

そして、今年は早くも夫の三回忌なのだ。コロナ禍が一日も早く収まり、世の中の生活が元に戻り、お葬式や法要にも来られなかった人たちにも元気な姿で会えることを、今から切に望んでいる毎日である。

雪国に暮らす

山崎隆昌



昨冬一月中旬、上越の地は激しい集中豪雪に見舞われました。雪は山雪ではなく里雪で、高田や直江津など平野部では大混乱、右往左往し、この十日間はまだ人々の記憶に新しい。『百科事典マイペディア』に述べられる雪。

(次面に続く)

「日本の北陸地方は世界的な豪雪地帯として知られているが、これは、日本海上の水蒸気が冬の北西季節風によって沿岸地方に運ばれ、これが中央山脈につきあたり、強制的に上昇させられるとき、多量の雪となって降るために起こる。降雪の型には沿岸の平野部に多く降る里雪型と山寄りの地方に多く降る山雪型がある。北陸地方に多くの被害をもたらすのは、里雪型の場合に多い」

昼夜なく薄黒く暗い空から降る雪は、瞬く間に二層近い積雪。降り方も尋常ではなく、昼間でも降る雪に辺りはかき消され、隣家の建物や立ち木もかすんで良く見えません。

屋根の雪下ろしにご苦労された方も多いと思います。浄國寺でも、出入りの建築屋さんにお願ひし、本堂、庫裡の屋根の雪下ろしをしました。手際良く見事な仕事ぶりに感嘆。

この猛烈な集中豪雪に、道路の除雪が追いつかず、主幹の国道で車が全面ストップするあり様、市内の各道路は寸断され、私を含め多くの人達が全く車を使えぬ日が続き、朝夕にはリュックを背負い堅い圧雪の道をひたすら歩く通勤の人々の姿が見られました。

雪のため、月参り、寺の行事や年始回りも一部お休みし、皆様に失礼を致しました。

地方に暮らす人々には車が生活の支えですが、この雪で知らされたのは、私はすっかり車に寄りかかり、車の無い生活をする事が

自分には余程難しいということでした。

人新世と呼ばれる現代は、車に限らずパソコン、スマホ等の道具、SNS、AI等の新たに開かれた関係世界が拡がり、これらの上に私たちの生活が成り立っています。速くて、大量に、簡便に、正確に等々をひたすら求め生活の中に次々道具を備えていくのです。果たして、これが人間の文化生活なのか？です。ゴリラ博士の山極寿一は「コロナウイルスのことも含め、自然と人間文化との関係について問い直せ」と、現代人の文化的生活のあり方に警鐘を鳴らしておりますが。

地球温暖化の問題も含め、人間はもっと自然に身を寄せるべきで、自然の無限の命の縁の中に人の命も生かされているということに謙虚になることが問われていると思います。親鸞聖人は「全ての命あるものは、過去、現在、未来につながる父母兄弟である」(歎異抄五章)と厳しく述べておられますが。

雪国に住む人々には、雪は衣食住の一部です。秋の雪囲い、降雪時の道付けや除雪、雪下ろし、さらには冬期の出稼ぎ等々、子供らには様々な雪遊び、また雪を利用した野菜の雪下貯蔵、ワイナリーの雪室等、人々と雪との付き合いに深く強いものを感じます。

晴れた朝、白一色に輝く雪景色の美しさは、雪国に住む人の特権でありましょう。深い雪の中、炬燵に近所さんが集まり、おしゃべり、

お茶を楽しむのも満ち足りた時間です。やがて、まだ雪多く残る三月、春仕事の準備が始まります。暖かな春を迎えるために。北陸金沢生まれの詩人室生犀星は、この雪解けの季節のことについて『ふるさと』という美しい詩を遺してくれました。

ふるさと
雪あたたかくとけにけり
しとしととと融けゆけり
ひとりつつしみふかく
やはらかに
木の芽に息をふきかけり
もえよ
木の芽のうすみどり
もえよ
木の芽のうすみどり

私が高校時代に倫理社会を教えて頂いた、饒村義治先生(俳号 楓石)の俳句に、
雪国を捨てず雪解けあるかぎり
この句に詠まれた雪国に生活する人の立つところには私は深く共感を覚えるのです。
間もなく立春、越後平野に春の訪れです。

人心地

山崎 直子

クリスマス寒波、年越し寒波と、天気予報から目が離せなかった年末年始でしたが、二月早々の立春寒波もまた高田らしい冬の風景を運んできたようです。昨年は八月の売り始めから除雪機がよく売れたと聞きますが、街の機能が止まってしまふ程の一年前を思い出せば、備える方の気持ちもわかりますね。「去年よりはマシ！」のお声も聞きました。が、玄関前の雪の始末を終えて人心地つく、という方も多かったことでしょう。もう少し続きそうな今年の冬の空、油断大敵です。

そういうえばこの「人心地」は仏教の用語からきているそうで、「律義」や「勝利」等も元を辿ると違った意味合いを持つ仏教用語だったようです。私たちの生活の中にはこうしていつの間にか触れているものがきつと他にも沢山あるのでしょうか。よく口にする「ご縁」という言葉もそうですが、

これは「他生の縁」あるいは「多生の縁」といふべきところを「多少の縁」と間違われるとことがいまだに多いようで、それではいささか寂しいご縁のあり様な気もしてしまいます。

他にも、大谷大学のHPを少し覗いてみると「生活の中の仏教用語」として、お彼岸・見分・地位・四苦八苦・料簡・玄関・アバター・肉眼・世界・境界・娑婆・露地・開化・慚愧・無垢・大丈夫・金輪際・夜叉・無縁・仮説・毒性・精進・講師・邪魔・信・歓喜・流転・機縁・光明・作業・覚悟・忘己利他・行儀・未曾有・貪欲・普請・滅相・声明・開示・世間・虚仮・修羅・七宝・殊勝・流通・神通力・呵責・講堂・寿命・所詮・食堂などなど、沢山掲載されています。え、それも？と思われたものもあるかと思いますが、今の私たちが辞書で知る意味とは大分違った意味合いだったりもするので、興味のある方はご覧になってみて下さい。読み方も違っていたりして、前述の「律義」は「りちぎ」ではなく「りつぎ」と読むそ

うです。今更ながらの発見でした。

コロナの終息がまだ見通せない中ですが、人心地という言葉を持つ「生きた心地。また、ほっと、くつろいだ感じ」や「人間としての平常の感覚や意識。ひとごころ」という感覚を大切に過ごしていきたいものですね。

鯛魚・鯖魚

山崎隆昌

もう五十年以上も前のこと、愉快な仲間が居て、彼が笑いながら言うには「魚はさあ、すべて鯛魚と鯖魚なんだよ」と。

言う間でもなく、鯛魚は白身魚、鯖魚は赤身魚。旅先の宿で食事の時でも「ウーン、この鯛魚の刺し身は新しくうまいねえ」と来る。仲間内でも宴会等で「鯛魚・鯖魚」使われた。魚に限らず、名が付けられたことは大変なことであるし、大切にしなければならぬ。くさかげの名もなき花に名をいひし

初めての人の心をぞ思ふ 伊藤静雄
ただ昨今のテレビ等から流れる。物の名の氾濫に、いささか言ってみたくなくなった。

さて、今晚は焼いた鯖魚におろしをたっぷり添えて一杯いくはとするか、なんて

ワン公物語

—華のつぶやき— (25)



山崎 華 (慎子代筆)

私は華。パグ犬の雌。十三歳十カ月と十一カ月、この世の生命が終わって、もう一年が経とうとしている。

私のお墓は庭の一隅に、目印の小さな石が置かれて用意されている。更紗木蓮の木陰、周りには杉苔が茂っている。その石の下にはハイジ姉さんと蓮姉ちゃんのお骨が埋められているのだ。

そしてすぐ側には、三代前の住職の歌碑も建っている。そこには

土筆 生きむ願いの ひとすじに
大地を割りて伸び出でにけり

って書いてあるんだって。いつだったか散歩の時に母さんが言ってた。

私がいなくなつた後、母さんはその歌碑の前でこうも呟いていた。

「おじいちゃんもおばあちゃんも、ワン公達も皆、この短歌みたいに最後まで、生きよう、生きようって生き切ってくれたものね。諦めなかったものね。」

そんな一等地にお墓があるのだけれど、実は私の骨は、未だに土に還されておらず、小箱の中に収められている。母さんは毎日「ハ

ナ、ハナ」と小さな声でよびかけながら箱をなでてくれる。それからスギタさん。私が元気だった時もすごく可愛がってくれて、私はスギタさんが来る日が楽しみな程だった。今でも来た日には必ず手を合わせてくれるし時々、お花も供えてくれる。

忘れられていないことがこんなに嬉しいなんて、知らなかったなァ。

去年の今頃、私の状態はいよいよ最後に向かって下降線を辿りながら一進一退を繰り返していた。父さんと母さんが看取りに入ろうと決めた秋の終わりから獣医さんに行くことは一切止めて、台所の隅の母さんの側に私の寝床がセットされた。私はいつも皆と一緒にいた。

体調も食欲も変動があり「食いしん坊の華なのに」と言われながら、一切受けつけない日もあって当然やせ細るばかり、床ずれもひどくなり、母さんを悲しませた。

獣医さんに診て貰わないという選択は、誤りだったかもと動揺することもあったみたいだけど（そして今になっても、ふとその思いに囚われてしまうことがあるらしいのだけれど）母さん、去年のあの雪では通院することなどできなかったと思うよ。

人工透析の為に、そのしんどい体で遠い病院まで歩いて通った人の話や、通勤の為に長距離の雪道を歩いた人の話、父さんが聞いて

来たでしょ。一月の月参りだって、雪でお休みというのが沢山あったって、母さんの日記に書いてあるでしょ。

だから母さん、後悔しないでね。それに私は獣医さんに連れて行かれるのは、本当は嫌だったんだもの。母さんの腕の中で、小さく震えているのに気づいていたでしょ。注射されたり、目隠しされてレントゲンを撮られたり、お尻から何やらつつこまれたり、病気の予防や治療の為とは言え、車に乗って窓の外に見慣れた景色が見えると、おでかけ！と思っ

て嬉しかった気持ちだが、急にしぼんでしまっていたんだよ。

それに順番を待つ間の退屈なこと、いろんなワン公やニャン公やウサギなんかも来て、連れて来ている人間はそれぞれが（ウチの子が一番）と思っているのだ（母さんもその一人なんだけどね）。大体、私自身が自分をワン公だなんて思っていないんだから。どうして私がこんな連中と一緒に居るんだ？と思っていたからね。だから私は、他の連中が私に興味を示してアピールしても、それに応えようなんて気は全然なかったんだ。

それやこれやで母さん、最後の日々を家の中で皆に見守られながら暮らせたこと嬉しかったんだよ。だから母さん、後悔はしないで、ほら。

マ、イイカー なんだってば。

(以下次号)